

# 愛と優しさに包まれ ある孤児少女の成長

## ——ルワンダ内戦終結から24年



しもむら やすき  
下村 靖樹さん

1971年兵庫県生まれ。ジャーナリスト。東京写真専門学校報道写真学科卒業後、単身20歳でアフリカ取材に赴く。以降20数回アフリカを訪問。ソマリア内戦、ルワンダ内戦、ウガンダ子ども兵士、エボラ出血熱などの取材を行う。

現代アフリカ史上最悪の事件と称される「ルワンダ内戦」は1990～94年勃発。民族対立によるジェノサイド(集団虐殺)で80～100万もの犠牲者が出たと言われる。内戦の惨禍から生まれた孤児たちは、どのような人生を歩んでいるのか。ジャーナリストの下村靖樹さんに聞いた。



コロンベとの初めての出会い(2歳)(すべて撮影:下村靖樹)

### 内戦惨禍による孤児

#### ——初めて現地に入られたのはいつですか？

1995年、内戦が終わった1年後です。フツ族によるツチ族の大量虐殺はとりわけ1994年4月から100日間に激しかったと言われていますが、大半の人は前半で殺されました。

#### ——その痕跡はありましたか？

空港にはたくさん兵隊が立ち、国連機ばかり。空港の屋根には大きな穴、看板や家の壁に無数の銃弾の跡がありました。町に人は少なく、内戦が終わったばかりだという空気が漂っていました。教会には、1年たってもたくさんの死体が放置されていました。死体を見ると、銃の跡が残っていた。ルワンダのジェノサイドでは銃弾を撃ちまくって終わりではなく、ちゃんと死んでいるか1人ずつ確かめながらとどめを刺しているんです。効率的、かつ組織的に行くところが、他の地域のアフリカ人とは違う。今、ルワンダは経済的に発展して「アフリカの奇跡」と言われていますが、それを成し遂げる国民性が人を殺すという行為にも表れてしまっていたんだなと感じました。

——女性への暴力や暴行も激しかった。国連の調べでは10～25万人の女性が被害を受けたとあります。

レイプは単に男性が欲望を満たすためではなく、民族を消し去るためにやっていました。フツの男性がツチの女性をレイプすると生まれた子の血は半分フツになり、極端な話、同じことを繰り返せばどんどんツチの血は少なくなってゆく。同じようなことがユーゴスラビア内戦のボスニアでも行われていたらしく、民族浄化の方法です。その結果、多くの女性が望まない妊娠をし、とくにルワンダは大半がカトリックのため墮胎することもなく出産しました。そして、生まれた子どもの多くは捨てられる。こうしたジェノサイドによる犠牲のほか、難民となって避難する途中に親とはぐれる子どもも少なくなく、97年にルワンダの孤児は計12万人に達したと言います(ヒューマン・ライツ・ウォッチ調査)。

### 手を差し伸べる

——孤児の少女コロンベもその一人ですね。

コロンベは「平和のハト」を意味する名前です。生後まもなく、新聞紙にくるまれて孤児院の玄関に捨てられていたところを、当時ルワンダで豆腐の製造・販売をしていたマドレーヌという女性が発見し、引き取りました。その後、コロンベはマドレーヌの同僚のテレサという女性に引き取られ、その家庭で育てられました。アフリカ全般に言えますが、アフリカは残酷だけど優しい。100万人も殺すが、孤児がいれば気安く受け入れるんです。その感覚というのは日本人としてはよくわからない。コロンベはテレサの家で使用人として子守りなどしながら、学校に通いました。私は彼女が2歳だったころに出会い、その後ほぼ毎年コロンベの成長を見てきました。

——日本でもかつて戦争孤児がたくさんいて、亡くなる子も多かった。コロンベは孤児という境遇に卑屈になったりすることはなかったのですか？

日本人の考える孤児の辛さとは、少し違うかもしれません。児童労働は当然ありますが、生命力が違う。子ども兵士も存在し、えぐいものもたくさんありますが、日本人が「この子可哀そう」と考えるレベルでも、当人たちは前向きだったりします。12万人の孤児のなかにも、たくましく成長した子がたくさんいると思います。

コロンベも一時悲しい思いをしたのか、1、2年学校に行けな



6年ぶりのマドレーヌとの再会(9歳)



2007年当時の家族写真(前列右、11歳)



幼なじみのガボ(左)と自宅の庭で(中央、12歳)

かったときがあります。ただアフリカの場合、多くが現実を受け入れるんです。日常的にたくさん死を見ているので、「死ななければいい」と言う子どももいました。死ぬほどの虐待をされなければいい、空腹でもなにか食べさせてもらえればいい。大人から子どもまで目の前にあるものを素直に受け入れ、そこに自分の感情を表現できるというのがアフリカの一番の魅力じゃないかと思っています。コロンベはすすくと育ち、現在キガリ大学の4年生となり情報統計学の勉強をしているそうです。

もなる。お金がなければ、病気になったとき薬を買えないし、医療も受けられない。それを目の当たりにしてきました。ただ、唯一、子どもは未来の宝というのは、どの現場に行っても間違いのないと思います。子どもが未来を創る。とくに写真というフレームのなかに納めることによって、ダイレクトに伝わってくるものがあります。子どもが笑っていないというのは、レンズを覗いているとよく分かるんです。子どもたちが本当にいい笑顔を見せてくれたときには「ああ、この国には未来がある」と心底思います。

## 憎しみの記憶

——ルワンダは内戦終結から24年がたち、国も復興しています。

現在、カガメ大統領の強力なリーダーシップの下、国づくりは順調に進んでいます。内戦後、わずか2年で殺した側のフツが戻り、ツチとの共生が始まりました。その後、大規模な内紛を起こしていないというのは称賛に値すると思います。また女性の社会進出を促す政策で、女性にチャンスが増えているのも事実です。高い教育を受けたハイクラスの人たちにとっては門戸が広がっている。しかし、コロンベのように孤児で普通程度の学力だと、男尊女卑がかなり残っているので就職は厳しい。

——人びとは憎しみ合った記憶を乗り越えたのでしょうか。

できている人もいます。フツの人が戻ってきたときに発生したのが家の問題でした。政府は所有権をフツに与えた。ツチと同じ村に暮らし、表面上は共存しています。

ただ小さな事件から問題の根深さを知ることがあります。紛争が終結して数年が過ぎたころのことです。取材に同行してもらうために雇ったツチのドライバーが、友人だったフツの男に殺された。二人はすごく仲が良さそうに見えました。しかし、内心ではツチの男は友人が自分の家族を殺したのではないかと疑い、フツの男は復讐されるかもしれないという恐怖心があり、探り合いは相当のものだったにちがいない。それにまったく気づかなかった私の目は節穴でしたが、外部の人間が思い及ばない根深いものがあると教えられた事件でした。`忘れたふり、をして24年です。いま国が大きく成長していますから、とくに若い世代は未来に目が行っていて、民族問題を口にする若者には出会いません。

## ゼロから1になる

——ルワンダの取材を通して、一番伝えたいことは何ですか。

人の命は平等だと言いますが、それは違う。そのことをアフリカの取材を通して実感しました。人の命はお金次第でどのように



現在のコロンベ。日本の同世代同様、片時もスマホを手離さない(21歳)

アフリカは、非常に残酷な面があります。子どもを道具としか見ていないケースも多い。反面、人は見返りを求めるでもなく孤児に手を差し伸べることもする。その矛盾がアフリカらしく、魅力でもあります。コロンベはこの世に生まれ落ちて、育ての親のマドレーヌに出会うまでゼロなんです。親族はいないし、だれも手助けしてくれない。そのゼロだった子が一握りの愛と優しさを受けて育ち、大人になっていつか家庭をもつ。ゼロから1をつくることができる。人間は100万人も殺してしまうけど、ゼロだった一人の少女を1にすることができる優しさもある。それを証明できるのではないかと。そんな思いが、長年ルワンダを取材している私の原動力となっています。

(聞き手・近藤敦子)